



山田 : こんばんは。「ハートネット TV」です。今日は、60 歳を過ぎて自分の人生を取り戻し、再び歩み始めた一人の男性の話を、是非聞いて下さい。望んだ訳ではないのに、40 年もの長い間、精神科病院に入院していた時男さん。現在、63 歳です。

退院のきっかけとなったのは、東日本大震災でした。入院していた病院が原発事故の避難区域にあったために、戻れなくなったのです。

なぜ 40 年もの長い間、入院せざるをえなかったのか。

そしてどういった経緯で病院を出たのか。

まずは時男さんのこれまでをご覧ください。

時男さんは今、群馬県太田市で暮らしています。



(居酒屋に入る時男さん)

時男：こんにちは。腹減った。お茶くんない？

週に1度、なじみの店に足を運び、女将さんや常連客と話をするのが何よりの楽しみです。

女将：おとなしく飲む人だよ。ほんとにおとなしい、草刈正雄は。

ディレクター：草刈正雄？

女将：だって似てると思わない？

似てるよ、ホントに似てる。ね。

店の人たちは、時男さんが長い間精神科病院に入院していた事を知っています。

常連客A：私なんか、全然精神病だと思って接してねえから。

常連客B：みんな差別してないから。

時男：この人たちはみんなやさしい人ばっかだよ。

時男さんは 10 代の時、統合失調症を発症しました。



妄想などの激しい症状は、長い間出ていません。服薬と、週に2度のデイケアで体調を維持できています。

(デイケア担当 石川信義医師)

石川 : 安定してると思います。まったく大丈夫だと感じます。

時男さんはグループホームで暮らしています。

時男 : おはようございます。その小さな桜見に行ってくる。

40年に及ぶ入院生活は、家族との大切な時間を奪いました。



時男 : 満開だね。

ちょうどいいね。

子ども時代、福島で過ごした時男さん。桜を

見ると、そのころの記憶がよみがえります。

父親の会社の花見に、家族で出かけた時の事です。

時男：福島に信夫山っていう山があって、その花見に行ったことある、会社の花見で。楽しかった。あとき姉さんもいたし、弟もいたし、家族5人、あと社員のひとと一緒に飲んだり歌ったりして。

入院する前、家族との最後の思い出です。

時男：もうあれから50年…。半世紀すぎたね。もう長いな。

10代で発症 そして病院へ

時男さんが初めて精神科病院に入院したのは、
今から46年前の1968年の事です。



当時、時男さんは親戚を頼って福島から上京し、

働き始めたばかりでした。しかし、慣れない環境と人間関係によるストレスから体調を崩し、妄想などの症状に襲われるようになりました。そして、都内の精神科病院に入院します。

16歳でした。

このころ、国は精神障害者の隔離収容政策を進めていました。

大きな契機となったのは、1964年に統合失調症の少年が起こした傷害事件でした。

マスコミも一斉にキャンペーンを展開し、精神障害者を「危険な存在」と見なす社会の風潮が作られていきました。



そのころの精神科病院の多くは、畳敷きの大部屋に大勢の患者が詰め込まれる劣悪な環境でした。入院したばかりで興奮状態にあった時男さんは、この先自分がどうになってしまうのか、恐怖を感じました。更に衝撃を受けたのは、電気ショック療法でした。

患者の頭部に電流を流し、症状を抑制する治療法です。

時男：電気ショックを受けた人の表情見たんだけど、窓から見たら、目が白目向いて、手がぎゅーとこんな震えて、すごい形相だったの。逃げようと思ったの、おっかなかったから。

不安に駆られた時男さんは、病院を逃げ出しました。

大雪の降る寒い夜、ヒッチハイクを重ね、住み込み先だった親戚の家にたどりつきます。しかし、すぐに病院に連れ戻され、保護室に収容されました。

その後、時男さんは何度も症状を悪化させ、入退院を繰り返しました。（略）

（続きは、次のサイトを <http://www.nhk.or.jp/heart-net/tv/summary/2014-06/10.html>）